

■2018 D1 GRAND PRIX SERIES Rd. 1・2 OSAKA DRIFT

コースコンディション：ドライ

PACIFIC RACING TEAM DUNLOP 村山悌啓選手（車両：NAC ガルパン S14 激☆メガテック IK）

最終成績：第1戦・単走予選不通過／第2戦・単走予選不通過

■レポート

2018年のD1GPシリーズが開幕した。その会場は大阪・舞洲の特設コース。コースレイアウトは昨年とほぼ同じで、直線から振り出してコーナーに入り、ヘアピンを抜けて戻ってくる形だ。この手のコースでは、一気に大きな角度をつけてコーナーに進入する派手なスタイルがいいと思われがちだが、そうすると進入したあとのコーナーでほぼ確実に角度が戻り、得点は伸びなくなる。したがって実際は、キレのいい振り出しは必要だが角度は適度に抑えて、スムーズにコーナーに入る走りが求められる。村山選手の走りのスタイルともマッチングがよさそうなので、期待できるコースだ。このコースで、土曜日と日曜日に第1戦と第2戦が連続で開催された。

村山選手はオフシーズンに、マシンのへたっていた部品を交換し、外装もきれいにして開幕戦に臨んだ。練習走行ではさっそくテールをコンクリートウォールにぶつけてしまったが、走行に支障があるほどのダメージではなく、距離感もつかめたとのことだったので、問題はなさそうだ。しかし、練習走行からときどきエンジンの吹けがわるくなる症状が出ていたのが気になった。ひととおり問題となりそうな箇所をチェックして、金曜日夕方の第1戦単走予選に臨む。

1本目、テールを振り出してコーナーに飛び込んだ村山選手だったが、そこでアクセルを入れてもエンジンが吹けてくれず、ドリフトが維持できない。進入速度も低めだった。2本目も同様に、ドリフト開始直後にエンジンが吹けなくなり、ドリフトが維持できず、まともな得点をだすことができないまま、予選敗退となってしまった。

その後エンジンまわりをチェックした結果、バキュームホースが切れていることが判明。そこからエアを吸っていたことが原因だと思われた。そこは修理をして、日曜日の第2戦を迎えた。

しかし、日曜日の朝のチェック走行でも、症状は改善されていなかった。けっきょく原因は究明できないまま、第2戦の単走予選が始まってしまった。

エンジン不調の症状は金曜日より悪化していて、もはや加速もままならなかった。けっきょく村山選手は2本ともまったくドリフトができないまま終了。残念ながら2戦連続での敗退となってしまった。

両日とも、村山選手がドライバーとしての技量をまったく発揮することなく終わってしまったのは残念なところ。次は万全のマシンコンディションで、本来の走りが見たい！

■村山悌啓選手コメント

金曜にここに来る前にテストとかもしてたんで、そのときはふつうに吹けてて、金曜日の朝もふつうだったんですけど……。練習で、走りの的にも「あ、こういう感じか」ってなんとなく感触はつかめていたのが、練習の1本目の途中くらいでフケなくなってきて、そこから悪化するっぽうで。いろいろ交換したり、ずっと徹夜するくらいの作業で配線とかも替えたり、ぜんぶやったんですけど、けっきょくたまにフケるんですけど、ずっとフケるっていうことはもうなくて。残念です。

でも次までに2週間あるんで、このあいだに怪しいところはぜんぶ新品に替えてもらって。もうコンピューターの制御からぜんぶ変えちゃおうかな、とも思ってるんですけど、あとは間に合わせもらえるようお願いするしかないんですけど……。

自分のミスで失敗してるんじゃないんで、ホントはいちばん悔しいんですけど、まあ、ただ事前に準備したつもりだったんですけど、それができてなかったのも自分のせいなんで、しょうがないですよ。ちゃんとやります。